

鶴峯八幡宮十二座神楽

あらすじ・見どころ編

千葉県指定無形民俗文化財

(昭和39年4月28日指定)

鶴峯八幡宮十二座神楽保存会

鶴峯八幡宮と十二座神楽(千葉県指定無形民俗文化財)の由来

鶴峯八幡宮は、鎌倉時代の建治三年(1, 277年)に豊前(現在の^{ぶんぜん}大分県)の宇佐八幡宮から^{かんじょう}勧請したと伝えられている。

ご祭神は、誉田別命(ほんだわけのみこと)と息長足姫命(おきながたらしひめのみこと)、そして、玉依姫命(たまよりひめのみこと)の三柱である。関東地方においては、鎌倉の鶴岡八幡宮、館山の鶴谷八幡宮と共に関東の三鶴と称されてきた。

この神社に伝わる十二座の里神楽は、鎌倉の八幡宮より伝えられたとされ、この神楽に使われるお囃子^{はやし}を別名「鎌倉ばやし」と呼び、神楽の十二座というのは、物語が十二曲あるという意味である。

また、お囃子の楽器は、^{どうながだいこ}胴長太鼓、^{だいびょうし}大拍子、^{しのぶえ}篠笛、^{てびらがね}手平鉦である。お囃子の種類は、オヒャラドドンコ、アガリハ、サガリハ、ソソリ、ミコ、カマクラ、サルタ、オカザキ、コンコンの九つ、時にはこれらが組み合わされて演奏される。

鶴峯八幡宮の神楽は、昭和39年4月28日千葉県無形民俗文化財に指定され、鶴峯八幡宮十二座神楽保存会により伝承されている。

～ 鶴峯八幡宮の十二座神楽演目 ～

1. 猿 田 彦 の 舞
2. 副 巫 女 の 舞
3. 稻 荷 様 の 舞
4. 月 日 の 巫 女 の 舞
5. 恵 比 寿 様 の 舞
6. 三 韓 の 舞
7. 八 幡 様 の 舞
8. 老 人 の 舞
9. 浦 島 の 舞
10. 湯 立 の 舞
11. 太 刀 の 巫 女 の 舞
12. 山 の 神 の 舞

◎神楽に使用する楽器

1. 胴長太鼓(どうながだいこ)
2. 大拍子(だいびょうし)…神楽の演奏全般を指揮する。地元では鼓と呼んでいる。
3. 篠笛(横笛)…ソソリ時の^せ迫り上がりは、笛がリードする。
4. 手平鉦(てびらがね)…シンバルを小さくしたようなもの

◎神楽殿で使用するもの

1. 千葉県指定無形民俗文化財の幕
2. 幟(のぼり) 一対
3. 注連縄(しめなわ)
4. 櫛(さかき)…柱に取り付ける。
5. 演目

◎舞台

1. 四方固め ①～④
2. 斜四方固め ⑤～⑧
3. 八方固め ①～⑧
4. 十二方固め ①～⑧～④
5. 四方固めとは、^{よすみ}四角を^{はら}禊い清める動作。
八方固め、十二方固めは、四方固めを
2回、3回繰り返す動作。



※各隅に神が宿るとされている。

◎舞の決まり

1. 歩足は左足から
2. すり足も左足
3. 舞の動作は三回、ただし、状況(短縮した場合)により、変更あり
4. ソソリとは、喜び、怒りなど^{たか}昂ぶる感情を表現

◎登場する神々や人物等

神々・人物等	内 容
猿田彦(天狗)	天孫降臨時の道案内(露祓い)
幣束持ち	猿田彦の天地再拝時の幣束持ち
お多福 (おかめ・おた)	どんな苦厄も苦と思わず、いつも笑顔を絶やさないお母さん
ひよつとこ (おっぺ)	お父さん、場を盛り上げる道化師
稲荷様	農家(農民)の守り神、五穀豊穡の神
きつね	稲荷様の神使、つかわしめ
巫女	日の巫女→天照大神(あまてらすおおみかみ)→昼を表している。 月の巫女→月読命(つくよみのみこと)→月の神、夜を表している。
恵比寿様	漁業(魚民)の守り神
神功皇后	庶民の守り神、仲哀天皇の妻、武芸の達人で、子宝・安産の神
八幡様	鎮守の神
鍾馗	鎮守の神を守る警護役、疫病や災厄を祓う。魔除けの神。
浦島	伝説の人物
鬼	悪の代名詞。姿は恐ろしい形相で見る人に恐怖心を与える。 しかし、内面は淋しがりやで、心の優しい持ち主。
太刀の巫女	庶民の生活を守る番人。
山の神	春から秋にかけての水田の神。収穫が終わると山に帰り木挽き、狩猟、鉾山、山で仕事をする人の神となる。

(補足)

神功皇后は、自愛に溢れた安産、子育ての守護神とされた。

神功皇后を祭神とする神社は、

- ・住吉大社
- ・鶴岡八幡宮
- ・全国の八幡神社、八幡宮

◎小道具

小道具	演目又は出演者
大幣 <small>たい へい</small> 束 <small>むく</small>	猿田彦
小幣 束	月日の巫女、稲荷様
稚児冠 <small>ちご かんむり</small>	月日の巫女
三 <small>さん</small> 方 <small>ほう</small>	着座する舞
白 <small>はく</small> 扇 <small>せん</small>	猿田彦、三韓を除く舞
振り振 <small>ふり ず</small> 鈴 <small>すず</small>	巫女、湯立、太刀
弓 矢	三韓
刀	太刀、老人
宝 <small>たから</small> 珠 <small>たま</small>	八幡様
剣	八幡様(鐘馗)
床几 <small>しょうぎ こししょう</small> (胡床)	八幡様、三韓
薬 箱	八幡様(医者どん)
薬	八幡様(医者どん)
檎 <small>こし</small> 棒 <small>ぼう</small>	八幡様(鬼)
種 <small>たね</small> 粉 <small>こな</small>	稲荷様
釣 <small>つり</small> 竿	恵比寿様、浦島

小道具	演目又は出演者
魚 <small>うい</small> 籠 <small>く</small>	ひよつとこ(おっぺ)
瓢 <small>ひょう</small> 箆 <small>たん</small>	ひよつとこ(おっぺ)
鯛 <small>たい</small>	恵比寿様
煙 <small>えん</small> 管 <small>せ</small>	ひよつとこ(おっぺ)
餌 <small>えさ</small>	恵比寿様(ひよつとこ)
玉手箱	浦島
手 鏡	浦島
釜 <small>かま</small>	湯立
桶 <small>おけ</small>	湯立
薪 <small>まき</small>	湯立(ひよつとこ)
火吹き竹 <small>ひふき たけ</small>	湯立(ひよつとこ)
大 <small>お</small> 麻 <small>めさ</small>	湯立
屏風岩 <small>びょうぶ いわ</small>	湯立
重 箱	山の神
餅 <small>もち</small>	山の神

十二座神樂のあらすじ・見どころ

1. 猿田彦の舞(天狗) 20分 お囃子：サルタ、フリコミソソリ 十二方固め

あらすじ

前半 大幣束による露祓いの四方固め

中半 大幣束を神に見立てての天地再拝、世の中、全てが災いのない日々が送れる様祈願。猿田彦の天地再拝のみ変則斜四方固め。

後半 お囃子がフリコミソソリに変わり、早い動きの舞、^せ迫り上がり、^{たぐ}迫り出し、^{はら}手繰り引き寄せ、^{はら}祓う。

見どころ

大木の林立する、静寂な鎮守の森に響き渡るサルタの音色を聞くと、胸の奥から湧き出てくるものがある。言葉には、表すことができない何かを感じ、心が清められ、安堵する。また、ゆっくりした舞にも、^{おごそ}厳かな威厳を感じ、曲と合せると、天孫降臨の際、祓い清めながら、道案内をしている様子が想像できる。舞いも道中の安全を確認する様に面を左右上下に振り、尚且つ、体を大きく動かし、威厳を誇示する様に舞う。

後半の迫り上がりでは、お囃子が最高の調和となり、盛り上がる。力強く、激しく打ち鳴らす胴長太鼓、大拍子のバチ、篠笛の高音が一体となった時には武者震いがする。舞は、天孫降臨に喜び、徐々に^{たか}昂ぶる気持ちの盛り上がりを迫り上がりで表し、喜びが頂点に達した時、迫り出しで喜びを一気に表す。神の御加護を手繰り引き寄せ、悪霊を祓う。人の息づかいを思わせる舞である。

2. 副巫女の舞

20分

お囃子：ミコ

斜四方固め

あらすじ

真面目で几帳面なお多福(おかめ)と何事にも一生懸命だが、いつもドジってしまうひよっこ(おっぺ)、お互いを気遣いながら舞う二人。たまに脱線し、助平な一面も見せるひよっこ(おっぺ)。

見どころ

おかめ、ひよっこ(おっぺ)の仲睦まじい夫婦愛、^{なご}和やかな家庭。自分達夫婦、父母の優しい一面を思い浮かべる事ができるのではないかな。

ひよっこは舞の技で観客の笑いを誘い、場を盛り上げ、和やかな雰囲気にする。ひよっこと観客が一体となると、ひよっこが首を曲げると観客も無意識に一緒に首を曲げている。そうなるとひよっこの独壇場。舞に、さらに磨きがかかる。

助平の一面を見せるひよっこは、誰もが持っている欲望や欲求、願望を表現している。

ひよっこだけは誰でも代役ができるものではない。それは、その人の持って生まれた感性や育った環境に左右されるからである。その場を盛り上げる能力は天性のものが必要になる。

3. 稻荷様の舞 20分 お囃子：杖ヲドソ、コンコン 四方固め あらすじ

五穀豊穡を願い、水田の四角^{よすみ}(みぞぐち、みのて、やなじた、くろばた)を^{はら}^{きよ}禊い浄めた後、種播き^{たねま}神事^{しんじ}を行おうとした時、どこからか遊び盛りの元気な子ぎつねが現われ、無邪気に遊び始める。しばらくして稻荷様は、子ぎつねを呼び集め種播きを教え、一緒に種播き神事を行う。

見どころ

小学生の男の子が子ぎつねの装いで舞う姿は可愛らしく、見ている人に思わず笑みがこぼれる。稻荷様が種播きを子ぎつね達に一生懸命教え、子ぎつね達は、稻荷様の真似をして種播きをする姿はとても微笑ましい。稻荷様は、領民を飢餓から守り、国を豊かにするため、稲作を広める。稲作は、食の原点で、種播きは農民の、最も大事な行事であり、過去には、色々な事情で神楽の奉納が危ぶまれた時でも、稻荷様の舞だけは中止することなく続けられてきた。

4. 月日の巫女の舞 15分 お囃子：ミコ 斜四方固め

あらすじ

白扇、幣束の二つの舞があり、月と日に例え、月は月読命(つくよみのみこと)で夜を表し、日は、天照大神(あまてらすおおみかみ)で昼を表している。

見どころ

低学年の若い女の子がきらびやかな衣装で、お囃子に合わせて舞う姿は、誠に可愛いものです。上級生になると、ぎこちなさが取れ、女性特有の優しい、^{しと}淑やかな動きが舞に表れ、優雅で味わいのある舞が披露されます。

5. 恵比寿様の舞 20分 お囃子：杵杵トノコ、オカザキ 四方固め

あらすじ

恵比寿様が釣り竿を持つての四方固め。舞後、釣り場を探す。ごみ、藻等を取り除き、釣り糸を垂らす。お囃子がオカザキに変わり、魚籠を持ったひよっこ(おっぺ)が現われ、勝手に竿を上げてしまう。掛かるのはゴミばかり。釣りに飽きて、酒盛りを始める。やがて、竿に当たりがあり二人で力を合せて鯛を釣り上げる。そして、釣り上げた鯛を奪い合う。

見どころ

恵比寿様とひよっこ(おっぺ)の息の合った舞。ひよっこの演技の見せ所です。観客の盛り上がりで、舞が長くなったりします。

6. 三韓の舞 20分 お囃子：杵杵トノコ、ソソリ 四方固め

あらすじ

神功皇后が弓と矢を持って、外から入ってくる災いを防ぐ四方固め。
お囃子がソソリに変わり、夫の仲哀^{ちゆうあい}天皇が熊曾^{くまそ}征伐^{せいぱつ}に出かけ、留守の時、突如、鬼が現われる。鬼は神功皇后の所持している弓が欲しくなり奪おうとする。何度か失敗するがにじり寄り、弦(つる)に手が触れる。すると、他人の物を強奪しようとする暴挙に、武芸の達人で清廉潔白^{せいれんけつぱく}な神功皇后は怒り、成敗するため行動を起こす。二度は許すが三度目は捕らえ追い払う。

見どころ

前半は治安が守られ、平和な日々をゆったりとした舞で表し、鬼が現われてからの後半は、治安を乱された怒りを、早い動きの舞で表している。優しい面立ち^{おもた}の心の奥には、不正を働く輩^{やから}、悪を決して許さない厳格な性格を持っている。

7. 八幡様の舞 40分～無限 お囃子：北ヤマトノコ、ソリ、オカザキ 四方固め あらすじ

鎮守の神、八幡様が宝珠を持ち四方固めを舞う。次に、八幡様を警護する鐘馗が同じく四方固めを舞う。お囃子がソソリに変わり、下界に下っていた鬼が八幡様の優雅な舞を見て、八幡様の持っている宝珠が欲しくなり、戴きに行く。何度お願いしても断られるため、奪うことにした。しかし、八幡様の隣には、屈強な姿をした警護役の鐘馗がいるため、中々奪うことができないが、恐る恐る近づき三度目に成功する。八幡様は、宝珠を奪われたことを鐘馗に告げると鐘馗は怒り、鬼を捜す。鬼は、神に宝珠を見せながら、自慢する。しかし、有頂天になり過ぎ、鐘馗に宝珠を奪い返される。鬼は軽傷で息を吹き返し、再度、奪いに行くが、三度目は重傷となり横たえる。お囃子がオカザキに変わり、医者どん(お多福)とひょっとこ(おっぺ)が往診に駆けつけ、鬼の一命を取り留める。医者どんは鬼に、もう悪いことはしない様、良く言い聞かせ山に返す。

見どころ

八幡様のゆったりとした優雅な舞と鐘馗の勇ましい四方固め、鬼がど

こから現われるのかわからない恐怖心と好奇心、見つけた時の安堵感と恐怖。観客の目は鬼の動きに釘付けとなる。お囃子連は、鬼の恐怖、迫力を盛り上げる。ソソリの連続、境内の鬼の動き、振る舞い、泣き叫び逃げ回る子ども達。鬼が八幡様の持っている宝珠を奪う場面での、八幡様と鬼との駆け引き、鬼が宝珠を奪うしぐさをすると八幡様が白扇で宝珠を隠す動き、宝珠を奪われた場面で鐘馗が鬼を捜す動き、顔を左右に振り全身で怒りを舞いに表す。鬼を捕らえた時、鐘馗に命乞いをする鬼、傷ついた鬼を介抱する医者どん(お多福)とひょっとこ(おっぺ)。緊張した場面が続く。

神楽殿の舞台から出て自由に動き回れるのは鬼だけである。子どもの泣き声大きい程、悪霊を追い祓うことができると言い伝わっています。

舞手は、鬼になりきり、観客に恐怖心を煽る様に動き、日常生活を遥かに超越した動きをするため、祭りが終わると全身にキズ、アザ等ができ、全身が痛む。

8. 老人の舞 20分 お囃子：オヒャラドドンコ 十二方固め
あらすじ

- 前半 一家の長老として家族の幸せと繁栄を願い、一家の進むべき方向を見極める。白扇による四方固め。
- 中半 一家壮健、子孫繁栄を願う四方固め。
- 後半 一族の長^{おさ}として、降りかかる災いは、自ら盾となり、家族に災いが降りかからない様に、太刀で祓い清め、民が争う事がない様、太刀封印の天地再拝。

見どころ

満面に^え笑みを浮かべた、表情豊かな^{おきな}翁の顔には一点の陰りもなく、舞う姿は、^{おだ}穏やかな、^{いづく}慈しみの心が伝わってくる。災いもなく、人生を謳歌し、日々の幸せを神に感謝しつつ、長い人生を振り返る様にゆったりと舞う。面・体・舞が一体となり、舞手も老人になりきっての舞、非常に高度な舞の技が必要とされる。

9. 浦島の舞 20分 お囃子：オヒャラドドンコ 八方固め
あらすじ

浦島伝説を題材にした舞。釣り竿を持つての四方固め。後、青年が玉手箱を開けて老人に替わる。

見どころ

前半は、二枚の面を付けて、青年らしく、キレのある舞で踊ります。後半は、老人の姿に変化し、物柔らかなゆったりとした舞になります。変化が見所です。また、面を二枚重ねるため、視界が悪く、非常に難しい舞である。

10. 湯立の舞 25分 お囃子：オカザキ、ミコ、ソソリ 八方固め あらすじ

ひよつとこ(おっぺ)が悪霊祓いの湯かけ神事に使用する湯を沸かす。湯が沸くと、ひよつとこは帰ってしまう。入れ替わりに、巫女が現われ清めの湯かけ神事を行う。湯かけが終わると、お囃子も止まり、一瞬の静寂。巫女の(一天太平 榊葉にゆうとりしでてうちはろう 身には汚れの雲霧もなし)の声。この神楽唯一の発声、鐘馗が現われ、二人で巫女の舞を舞う。舞の途中で巫女が消えてしまう。鐘馗は知らず、最後まで舞い続ける。やがて、巫女が居ないことに気付く。お囃子がソソリに変わり、鐘馗は、怒り、慌てて捜す。苦勞の甲斐があり、無事巫女を見つけ、巫女を肩に上げ喜びを表す。

見どころ

ひよつとこ(おっぺ)が昔のかまどで湯を沸かす。薪を入れ、扇ぐが中々湯が沸かない。巫女の湯かけ神事と一声。鐘馗が巫女を肩に上げ、喜びを表している。鐘馗と巫女は親子ではないが、親子の絆を感じる。

愛情を注いで育てた我が子が居なくなってしまった親の心情は、計り知れない心の痛みを察する。親は我が身を犠牲にしても、我が子を助けて上げたいと思う心が感じ取れる。

11. 太刀の巫女の舞 25分 お囃子：北ヤマトノコ、ミコ、ワコミツリ 十二方固め あらすじ

- 前半 法の番人として、自ら潔白を表す、白扇の四方固め。善人には、優しく見える面も、法を守らず、治安を乱す悪霊・悪の輩には、鐘馗の様に恐ろしく、額の目から放たれる威光で心の内を見透かされ、恐怖を感じる。
- 後半 太刀と振鈴で領内を祓い清めながら巡視。
- 後半 抜刀してのフリコミソソリは悪霊・悪の輩には容赦しないという厳しい態度の表れ。

見どころ

武士の扮装で領民の治安を守っている。羽織った陣羽織には、領民の熱い願いがかけられ、舞には、他の舞より、更にキレのある動きが求められる。十二方固めは、世の中が隅々まで、隈なく治安が守られ、領民が安心して暮らしていける様にとの願いが込められている。

※太刀の巫女の舞は、神楽全ての舞が含まれた舞です。

12. 山の神の舞 25分 お囃子：北ヤマトンコ、フリコミツツ 八方固め あらすじ

- 前半 白扇の四方固め
- 後半 お囃子がフリコミソソリに変わり、餅を詰めた重箱を抱えての難しい舞。迫り上がり、迫り出し、手繰り引き寄せ、祓いから餅投げが始まる。

見どころ

十二座神楽の最後を締めくくる舞。山の神の舞のキレ、餅投げ、観客も緊張・興奮し、神楽と観客が一体となり、境内全体が最高潮に達する。

※以前は、秋祭りが終わってから、稲の収穫が始まったそうです。春に稲荷様が種播きした苗が、無事に育ち、秋には黄金色に色づいた稲穂の頭が垂れ、昨年同様、今年も豊作であります様に願い、昨年の米で餅を搗き、祈願し撒いたと思います。現在は、稲刈りが早くなり、今年収穫した新米で餅を搗き、今年の豊作に感謝し、餅投げをする“感謝祭”に変わっています。

十二座神楽の昭和からの歩み

鶴峯八幡宮では、昔は、年2回の祭りが開催されてきました。春季例大祭は3月15日に神楽の奉納、秋季例大祭は10月15日に流鏝馬と神輿・山車が出されてきました。春秋、共に前日の14日を宵祭（よいまち）、15日を祭（まち）と呼んでいました。当地区では、現在も祭（まち）を使用しています。流鏝馬は神社鳥居前の東西に延びる馬場先道で行われていました。しかし、年々馬を飼育する家が減少し、矢を射る武者の後継者もなく継続が困難になりやむなく休止しています。

神輿は、上高根、中高根の2社があり、昭和の初めまで神社本殿から引き出され、各集落を練り歩き、盛大に催されてきました。各集落には山車の屋台があり、青年団が祭囃子を演奏して祭りを盛り上げていましたが戦中・戦後の混乱で神輿、山車の修理資金難、担ぎ手、演奏者の不足等により休止しています。

神楽も一旦絶やすと復活させることが大変な事と認識していました。神楽連の雄志達は、僅かに地元に残った人達で、絶やさない様に必死で守り、戦後は、戦地から帰った人達も神楽に参加するようになりました。秋季例大祭行事が休止状態になり、昭和21年に春季例大祭の神楽が秋季例大祭に移され奉納されるようになりました。

この地区では代々家督は長兄が継ぐことが慣例になっていましたので、神楽も代々継承していくために長兄の参加は許されましたが、長兄以外に伝授すると他地区に流出の恐れがあるとし参加を認めませんでした。また、少女が舞う巫女の舞は、初潮のあった少女は神聖な神楽が汚れるとし、舞うことを許され

ない厳しい慣習がありました。

昭和39年4月に藤原先生(牛久・藤原整形外科医院長)のお力添えで千葉県無形民俗文化財に指定されました。指定を基に神楽連を改め、征矢甚喜知氏を会長とする十二座神楽保存会が発足しました。

秋季例大祭は、曜日に関係なく毎年10月15日に開催され、平日に秋季例大祭が催されると小学生・中学生は学校を半日で早退し、大人は会社に勤めていた方も多かったが休みを取り参加していました。鑑賞者も平日の秋季例大祭では少数でした。奉納神楽のため鑑賞者が少なくても催されますが、地域の方々にも見ていただきたいということから昭和60年に宮司・総代・保存会の方々が協議し、10月の第3日曜日の開催に変更となりました。

古い慣習を守っていたのでは、衰退の一途を辿り、継続が困難になると危惧し、慣習を破り、神楽に関心のある方は、他地区を含め誰でも参加できるようにし、また、女性も巫女舞だけでなく、他の舞やお囃子もできるように開放しました。少しずつ若人が参加するようになりましたが、衣装は神楽連時代に氏子のお婆さん達が神楽連のメンバーの身体に合わせて、手縫いで仕上げた物で、現在の若人に着付けると丈が短く、膝が見えてしまうので、新しく衣装を揃える計画を立てました。昔の衣装と同一の物が要求され、高価なため積み立てを始めることになりました。氏子の方々の協力と保存会の質素・儉約により資金の一部が積み立てられ、東京浅草にある大槻装束店で毎年少しずつ揃えるようになりしました。小学生の参加も増え、お面が不足になり昭和63年に影山良二さんの戦友で兵庫県太子町在住の能面師「三輪工雲先生」に狐の面二面を彫っていただきました。

常設の神楽殿はなかったため、秋季例大祭の前日に社殿の東隅に9尺角の仮設の神楽殿を設営して舞を奉納していました。最近の若人は身体が大きく、八幡様の舞では同時に5人も舞台上上がるので、狭く十分満足な舞ができませんでした。また、仮設のため不安定で危険でもありました。

社務所も仮設の建物を使用していたので、俄かに神楽殿建設の話が浮上し、平成18年に社務所を兼ねた神楽殿建設を伊藤規彦氏を委員長とする建設委員会が立ち上げられました。神社・氏子が一丸となり資金・物資・奉仕の協力と努力によって、現代の名工である市原市大戸在住「田辺揮一郎」棟梁による神楽殿が平成20年に完成しました。

念願であった神楽殿が完成し、衣装も揃い今まで以上の舞が奉納され、鑑賞者も年々多く集まるようになってきましたが氏子をはじめ他地区の方から「由緒ある神楽だが、同じ舞を繰り返し舞うので、内容が良くわからない。」という声が聞かれたため、平成25年から3年かけて原文永野良作、監修征矢善充保存会長による「あらすじ、見どころ編」の冊子を作成しました。広く神楽に関心を持っていただき、地域の宝として後世に継承して行くことが私達に与えられた使命・責務ではないかと思っています。

鶴峯八幡宮十二座神楽保存会 副会長 永野良作 記

